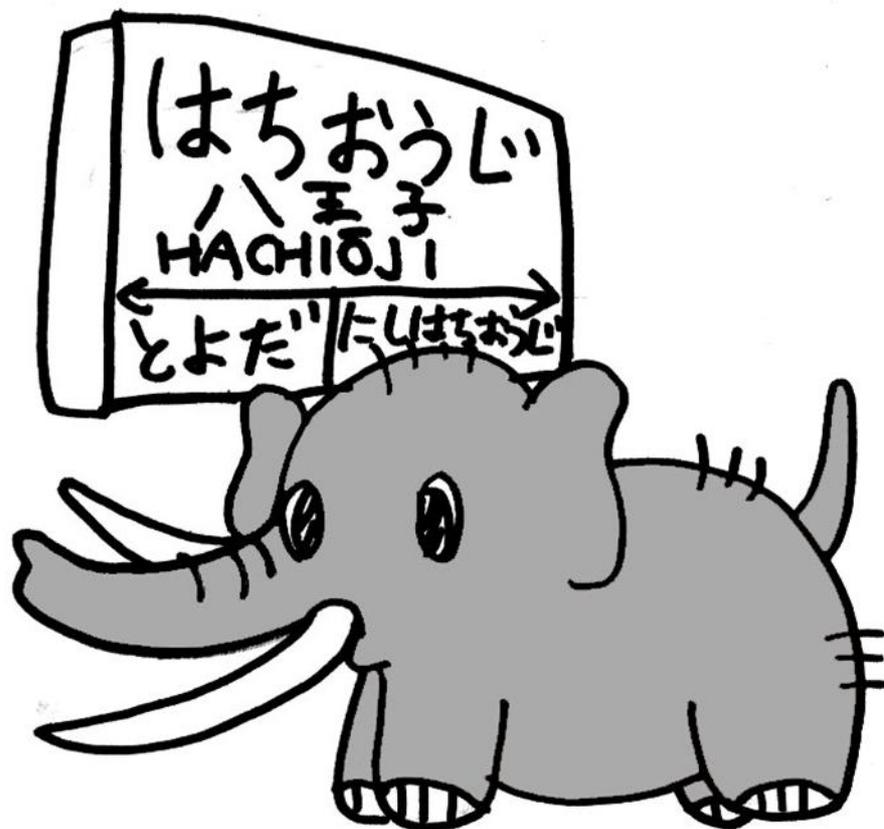


「ハチオウジゾウ」

非常に限られた範囲にしか「生息していない」「生息していなかった」「発見されていない」生物（種や亜種）には、和名の前にその土地の地名を冠することがあります。オガサワラオカモノアラガイ、ヤクシマミドリシジミ、トウキョウホタテ（化石種）などです。自分にゆかりのある地名が、生物の和名に冠されていたらとても嬉しいですが、そんなことはまずありません。「ミョウガダニムラサキシジミ（茗荷谷紫蛭）」とか「コマツジマオオクワガタ（小松島大鍬形）」なんてのがもしいたら、きっと昆虫学者を目指す子どもがたくさん出るでしょう。

私は八王子市で小学生から大学時代までを過ごしましたが、残念ながら生物の和名に「ハチオウジ」を冠したものはありません・・・と今日まで思っていました。しかし実は、いたのです。それも超大型哺乳類。その名も「ハチオウジゾウ（八王子象）」！



「ハチオウジゾウの想像図」 ニセ古代象研究家・ジミー田中氏画

徳島の友人一家が東京に遊びに来てくれて、今日は私が案内しました。息子さん（小6）が恐竜に造詣が深く、国立科学博物館を見たいというので、行くことにしました。私にとっては学芸員免許の取得で博物館実習をした、なつかしい博物館です。（30年前とは、展示内容が大きく変わりましたが・・・）ちょうど「太古の哺乳類展」という特別展（10月まで開催）をやっていて、運よく招待状（1600円→無料）が何枚も手に入ったので、最初にそれを見ることにしました。

国立科学博物館（愛称「かはく」）は、常設展示そのものの質が非常に高いので（科学系博物館

では世界一)、特別展にそれ以上の内容を期待するのが難しいことが多いです。しかし今回はちがいました。私は感銘・・・というよりも一種のショックを受けました。それは、かつての日本列島に、これほど多様な哺乳類が存在していた、という事実です。カバやバイソン(いずれも化石種)がいたことも驚きでしたが、一番関心を持ったのは、多くの種類のゾウが生息していたことです。

かつての日本列島にいたゾウといえば、ナウマンゾウしか知りませんでした。それも野尻湖(長野県上水内郡)の周辺にしか生息していなかったと、勝手に思い込んでいました。しかし、日本列島にはかつて、さまざまな地質年代に10種類ものゾウがいたというのです。しかもそれらの化石は、日本各地・・・例えば東京都中央区からも・・・出土しているというからオドロキです。その一つが「ハチオウジゾウ」です。

ハチオウジゾウの化石は、2001年に慶応幼稚舎(小学校)の教員によって、八王子市の浅川で発見され、その後2010年に「新種の絶滅種」と認定されました。実物の化石は慶応幼稚舎にあります。もちろん完模式標本(学名を決定した最も重要な標本)です。小学校にタイプ標本があるなんて、すごいことです。今回の特別展では、その貴重な標本が貸し出されて展示されたわけです。

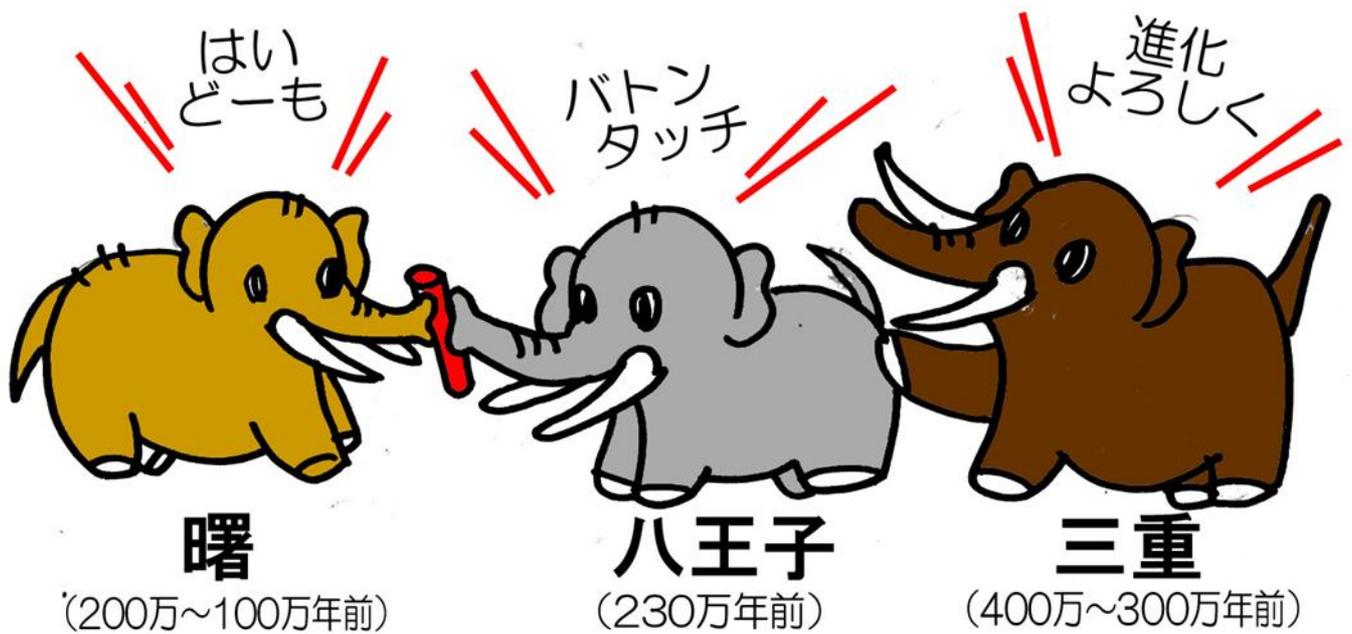


「ハチオウジゾウ」 *Stegodon protoaurorae* (完模式標本)
極めて保存状態の良い牙(長さ1.8m)、臼歯の実物が展示されています。

ハチオウジゾウの化石は、今から約230万年前のものです。それよりも前(400万年前~300万年前)には、日本列島は大陸と地続きで、動物は陸地を歩いて移動できました。その頃にいた大型のゾウがミエゾウ(三重象)です。その後、今から150万年前頃には、温暖化による海進(海面上昇)で、日本列島は海上に孤立しました。島国に残ったゾウは、小型化するという通常の進化とは逆の選択をしました。それがアケボノゾウ(曙象)です。ミエゾウからアケボノゾウへの進化の過程は、長い間謎だったそうですが、ハチオウジゾウの発見が、その空白を見事に埋めました。ハチオウジゾウは、化石の特徴から、その進化過程の中間の種類とわかったのです。・・・今日は、大変勉強になった一日でした。徳島の恐竜少年に感謝です!



「ハチオウジゾウの臼歯」(完模式標本) マンモスやナウマンゾウの臼歯と似ています。



「日本の古代象の進化過程精密図」 ニセ古代象研究家・ジミー田中氏作図

(お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋)